

平成16年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 ブワイガニ

学名 *Chionoecetes opilio*

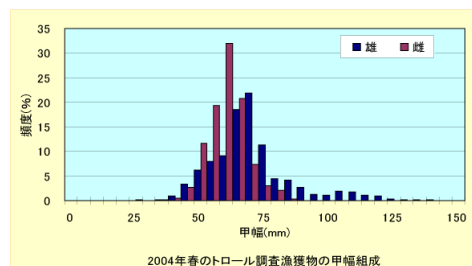
系群名 オホーツク海系群

担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特性

寿命： 不明
成熟開始年齢： 年齢は不明、50%成熟甲幅は、雄106mm、雌63mm
産卵期・産卵場： 5～6月(初産と経産の時期は同じ)、北見大和堆の北西部の水深150～200mの海域
索餌期・索餌場： 主な分布水深は100～300m
食性： 成体の餌生物は、甲殻類や二枚貝、クモヒトデ類が主で、この他に魚類、イカ類、ゴカイ類、巻き貝、ツノガイ類など
捕食者： マダラ、トゲカジカ

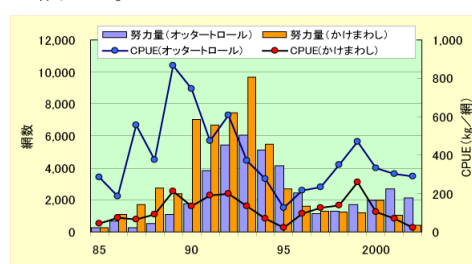
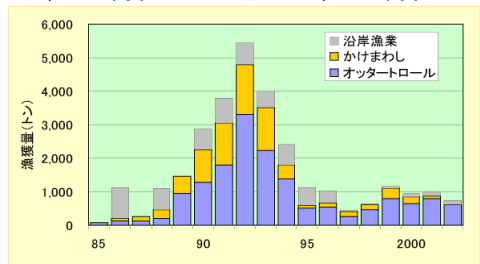


漁業の特徴

1980年代の後半までは、オホーツク海の日本水域における沖合底びき網漁業(沖底)によるブワイガニの漁獲は僅かであった。ロシア水域内での漁獲規制の強化、日本水域内でのスケトウダラ漁獲量の減少に伴い、1990年代始めに対象魚種をブワイガニに変え、漁獲量は増加したが、その後漁獲量は急激に減少した。操業期間は省令によって10月16日～翌年6月15日、甲幅90mm以上の雄のみの漁獲が認められている。

漁獲の動向

日本漁船による漁獲量(1996年3月まではカニ類として集計されているため、他のカニの漁獲量を含む。集計期間は7月～翌年6月の年度)は、1985年度の85トンから1988年度の1,101トンを経て、1992年度に5,428トンに達したのち減少に転じ、1997年度には436トンとピーク時の1/10に満たない水準まで落ち込んだ。その後、漁獲量は増加傾向を示し、2001年度は996トンとなったが、2002年度は736トンに減少した。

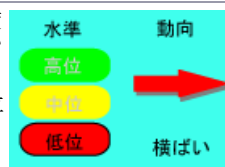


資源評価法

分布はロシア水域と連続していると考えられるが、ロシア水域に分布するブワイガニとの関係(移動、再生産)が不明であるため、日本水域での沖底の1985年以降の漁獲量やCPUEの動向から、資源状態について検討を行った。

資源状態

漁獲量とCPUEは沖底で漁獲されるようになった1980年代末から急激に増加し、1992年度にはピークを迎え、その後急激に減少した。ブワイガニは成熟までに長時間を要することからみて、この時期に日本水域に分布した漁獲サイズのブワイガニは大幅に減少したと推測される。隣接するロシア水域のTACが日本の海域に比べて非常に少なく、TACが資源状況を反映していると、ロシア水域へ移動回遊が考えられる本資源がこの事からも低位であることが推測される。日本水域での沖底の1985年以降の漁獲量やCPUEの動向から、オホーツク海日本水域に分布するブワイガニの資源の水準は低位、動向は過去5年でみて横ばい傾向にあると判断した。



管理方策

資源が低位水準で横ばい傾向にあるが、資源の回復のためにはこれまで以上に漁獲圧を高めないことが安全を見越して推奨される。過去3年度間の平均漁獲量(2000～2002年度)を元に、漁獲量を抑えるようにABCを算定した。本海域におけるブワイガニの分布はロシア水域と連続しており、精度の高い資源評価のためには、この水域との移動などの生物学的特性の把握が必要である。雌ガニの漁獲は禁止されているが、北見大和堆の北西海域には雌ガニの集群する時期があるので、禁漁区の設定や漁場の輪番による利用法の導入などによって、雌ガニの保護(混獲の回避)を図ることが望ましい。

	2005年漁獲量	管理基準	管理の考え方	F値	漁獲割合	評価
ABClimit	713トン	0.8Cave3-	漁獲圧を減らして資源を回復	-	-	-

yr						
ABCtarget	570トン	0.8ABClimit	漁獲圧を減らして資源を回復(予防的措置)	-	-	-

資源評価のまとめ

- ・ 漁獲量、CPUEは1980年代末から急激に増加したが、1992年度のピーク後に急減
- ・ 隣接するロシア水域のTACが小さく、TACが資源状況を反映しているとすると、ロシア水域へ移動等が考えられる本資源が低位であることが推測される
- ・ 漁業者からの情報によると密漁が資源に影響を与えている可能性もあり、早期に実態を把握することが必要である

管理方策のまとめ

- ・ 資源の回復のために漁獲圧力を減少させる
- ・ 精度の高い資源評価のためには、ロシア水域での情報収集が必要
- ・ 北見大和堆の北西海域に雌ガニが集群するので、禁漁区の設定等で雌ガニの混獲回避が必要

資源変動と海洋環境との関係

1996年3月までオホーツク海域のズワイガニの漁獲量はカニ類として取り扱われてきた経緯があり、正確な漁獲量データの蓄積が必要である。また、現存量を把握するための調査が行われているが、隣接するロシア海域へのズワイガニの移動回避などの問題がある。今後、早期に正確な資源量を推定する方法を確立する必要がある。ズワイガニの資源変動は、捕食者であるマダラ、浮遊幼生期の海洋環境に影響すると報告されている。オホーツク海では流水、宗谷暖流や東樺太寒流など取り巻く環境は非常に複雑であり、多くの環境要因と資源量変動との関連を解析する必要がある。

全国資源評価会議等における主な意見及び回答

主な意見

大幅な減船を実施し、雌ガニ保護、甲幅制限にも積極的に取り組んでいるが、その成果は全く見られていない。資源評価は沖底船の漁獲データが利用されているが、沖底船による操業については、ズワイガニの生息場所にロシア漁船のものとと思われる漁具が設置されて、満足な操業が出来ない状況の中での漁獲データである。(北海道機船漁業協同組合連合会)

回 答

この海域のズワイガニの生態については、調査に取り掛かったばかりで不明な点が多いのが現状ですが、資源管理に努めているにもかかわらず、漁獲量・単位努力当たり漁獲量が減っていること等から資源水準は低位と考えられます。ロシア側もTAC数量を下げてきていますが、ロシア漁船による漁獲の実態についても日ロの科学者交流などを通じて情報の収集に引き続き努めているところです。今後、新たに利用できる漁獲情報等が得られた場合には、速やかに再評価を行います。

資源評価は毎年更新されます。